The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	インワ王朝時代との関連におけるアラカン王朝の概況
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 1973, 29, p. 313-322
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80482
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

インワ王朝時代との関連におけるアラカン王朝の概況

服　部　正　一

"The Brief Outline of Arakan Dynasty in In:wa Period"

by Masaichi Hattori

The Mahā Yāzawin gives a list of 227 kings of Arakan between B. C. 2666 and A.D. 1784, when the country was finally annexed by Burma. Though the dates, the names and the number of the kings are doubtful, it is clear that the Burmese have been very long in Arakan, at any rate in Northern and Western Burma.

The Arakanese branched off very early, and being separated from Burma proper by a range of mountains, they had relatively little intercourse with the main stock, and Arakan has a separate history.

The Arakanese are proud of their assumed superior antiquity, but consider themselves Burmans.

ま　え　が　き

アラカンには古い伝統と歴史があり，古代ビルマ時代にも初代ビルマ王家であるタガウン王朝の創始者と云われているアビヤーザ王の二王子カンヤーザーヂーとカンヤーザーᵊゲの兄弟のうち弟であるカンヤーザーᵊゲはタガウン王家を継ぎ，兄であるカンヤーザーヂーはアラカン地方に一王国を建設した（学報12号，99頁），というあの頃よりすでにアラカン国が存在していたらしく，それより更に逆のぼって，ベナーレスよりきた王子の一人にアラカンが割当てられ，Ramawati と呼ばれた現在南アラカンに位置するタンドウェーに近いと思われる都で統治していた，と云われているが，これら古い記録は別として，ここでは主として，西暦15世紀の初期より18世紀頃までの約300年間，ビルマではインワ王朝時代にビルマ，シャン，モンの三民族が政治，経済，外交，軍事等の面において優勢を競い合っていた頃，ポルトガル人やオランダ人の援助を得て，これら三民族の闘争に加わってきたアラカン族の王朝について概述しよう。

これまでにもアラカン国についてはしばしば言及してきたが，ビルマ国，殊にインワ，ペグー，タウングー等の諸王朝及びその後の事件との関連をより明白にするため，以前に逆のぼって数冊の書物を資料としてアラカン国の概況を述べようと思う。

一般にアラカンという名で知られている地域はベンガル湾の東部海岸線に沿う約350マイルに拡がっている細長い地域を指すのである。ビルマ人は現在それを Yahkaing（ヤカイン）国と呼んでいるが，その古名は Rekkhapūr（国）と呼ばれていた。それはパーリ語の Yakkha〔Sk. Yakṣa〕，即ち「夜叉，鬼神」，また，Yahkaing の Ya は元来 ra と発音され，rakkhasa〔Sk. rakṣa〕「羅刹，悪鬼，鬼神」を意味する語より由来している。Yakkha または Rakkhasa は Meru 山に住居をもち，梵天界の Dewa の長である Thagyā:min（タヂヤー ミン）;（ビルマ語）〔Sakra「帝釈天」あるいは，ヒンズー教のインドラ神に相当する。〕の屋敷の周囲の番人のことを指すと云われている。また，この語はインドのアリヤン族によって仏教への改宗前のドラーヴィダ族及びモンゴル族にも適用されたようである。しかし，現在ではこの語はビルマ人によっても，アラカン人によっても Bilū: と呼ばれ，「鬼，怪物」を意味し，ペグーの歴史ではこの地方の未改宗の住民，即ち Judson の Bur-Eng. Dict., p. 727 では Taru Karen 族と記されている。アラカン人は自らをヤカイン，または，ラカインの名で呼ばれることを恥じず，彼らの祖先が Mramma（=Myanma）であり，上イラワヂ河に発生したビルマ族と極めて密接な関係にあることは疑いがない。

アラカン国はアラカン山脈によってビルマ本土より遮断されているため，アラカンはそれ自身独立の歴史の道をたどった。しかし，アラカン国もビルマ国と同様，強固な中央政府をもっていなかった。アラカン南部に位置するタンドウェイは13世紀まで独立していた。アラカンは海に臨んだ所に位置しているので，ビルマより早く仏教の影響を受けたと考えられる。そして，サンダトゥリヤ（Sanda-Thuriya, または，Chanda-Surya, 146～198）王の支配の頃にかの有名な大牟尼像が鋳造され，その後，長い間種々の奇蹟的な力がそれに帰せられている（学報16号，50頁）とする伝説もまだ論証の限りではない。ともあれ，サンダトゥリヤ王の統治以前に仏教が樹立されており，この王の時代に仏陀の像が初めて紹介されたことは認められる。

また，ヒンズー教と回教も盛んであった。ヒンズー教の伝来は783～957年にわたる歴代諸王の名として伝えられるものがいづれも“Chandra”の語をもって終っているということ，またこれら諸王の製作にかかると伝えられる円形徽章に Shiva の三叉戟とナーガリー文字とが浮彫されているという事実によって示されている。一方，回教もまたアラカンに伝播し，13世紀の頃アッサムからマライに至る沿岸地域には“Buddermokan”として知られる珍奇な回教寺院が点在していた。また，婦女隔離の傾向がビルマよりもアラカンにおいて著しくなったのも回教の影響であることは疑いない。しかし，10世紀以後は仏教がアラカン国の主な宗教となった。

アラカンの首都は次々と変えられた。Thabeit-taung, Dhanyawadi, Vesali（この三つの都は11世紀まで），Pyinsa（Sambawut とも呼ばれる，1118年まで，）Parin（1118～67年），Hkrit（1167～80年），Pyinsa（1180～1237年），Launggyet（1237～1433年），Mrohaung（または Myauk-u とも呼ばれる，1433～1785年）等であった。これらの都は Thabeit-taung を除いては Akyab 地方に位置していた。

アラカン国は常に他国からの侵入にさらされていて，776年には（ハーヴィでは10世紀と記されている，p. 90）上イラワヂよりシャン族が侵入し，18年間町や寺院が荒された。シャン族が去った後，260年程経過した時，パガン時代にビルマ王アノーヤターの頃に北アラカンはビルマの優勢を認めた。

チャンジッターの時代になって，アラカン国の王位は横領者によって占められ，正当の後継者はビルマに亡命した。そして亡命者ミンイェー・パヤの子 Letyaminnan（レツヤミンナン）は1118年にアラウン・シートゥによって王位に復せられた。（学報16号，69頁）。それ以後，アラカンはビルマの属国と見なされるようになった。また，12世紀中葉頃にはかの有名なマハームニ像すらも国内に漲る無政府状態のために生い茂る密林中に放置されて行方不明の有様であった。パガン王朝治下のビルマ族は北アラカンに対してはその宗主権を確立することに成功したが，その勢力は南アラカンには及ばなかった。北アラカンにおいてすら，歴代の諸王は単に宥和策としてビルマに朝貢したというに止まり，彼ら自身は常に世襲の王であって，パガンから任命された太守ではなかった。もっとも14世紀に，学報21号8頁に述べた如く，異見をいだいて分裂したアラカン国民の一部がインワの宮廷に新王の指名を求めたことはあるが，これは唯一の例外である。

Min:Htī:（1279～1374）

ミンティは9才にしてアラカン国王の位に即き，当時の首都はラウンヂエッであった。この王の時代にベンガルのインド人はテッ族（学報12号，98頁）と結び，アラカンを侵略していた。しかし，アラカン軍は彼らを撃退し，ある時は油に火をつけた筏をインド軍の船隊めがけて流し込むなどして敵船を破壊し，ベンガル州に含まれた町々をアラカン人は占領した。ミンティ王の時代にアラカン軍の勢力は充実完備し，ビルマ国に属するタイエッミョーさえも侵し，そこの支配者ミンシンゾー及びその一族をアラカンへ連れ去った。王は正しくアラカン国を治め，罪人を罰する際にもその罪に応じて正確な判決を下したことで知られている。その王が世を去った時アラカン国を適当に支配することのできる王はなく，60年間以上もビルマとモン・タライン国から侵略と略奪を蒙った。

14世紀になって，（ミンヂーゾワソーケ王の時代）* 再びインワの王はアラカンの内乱のためアラカン国民の要請に応じてインワ王の *弟をアラカン王として支配させた。1374年より1430年頃までアラカンはビルマに服従し，そして，またモン族の関渉にも従わされ，両種族によって侵略された。

*「再び」とあるのは，それより先にミンヂーゾワソーケ王が彼の叔父 Sawmongyi をアラカンの支配者として送り，アラカン国民の支持を得ていた後に起ったからである。（学報21号，8頁）

*書物によっては，インワ王の兄弟とも，息子とも，また，王の家来とも記されている。とも角，王と血筋の濃い者であったと推察される。ついでながら，現在でもビルマ人は非常に親しい間柄の者を nyī（弟）akō（兄）と呼ぶことがしばしばある，という事実からも察せられる。

Narameik-hla（1404～1434）

別名を Min:sawmon とも呼ばれ，アラカン国王の正当な血統を継いでいた。王位に即いた

年，即ち，1404年にアラカン軍がビルマに属する町々を侵したので，その報復のためインワのミンガウン王はその子ミン・イエチョーゾワにアラカンを攻撃させた。
アラカン王ナラメイ゛ラはベンガルに逃亡したが，*ガウル（学報22号，32頁）の王の優遇を得て，この回教王のために戦功を立てた。

*ハーヴィの「ビルマ史」五十嵐氏訳の117頁の〔註〕に「ガウルはベンガルの古市，別名ラクシュマナーヴァティー，または，ラクシュマナウティ。ナラメイ゛ラの当時ベンガルは回教王の治下にあり，デリーのモガール帝国からは独立していた。」と記されている。

その間にミンガウン王は王の婿養子ノーヤターと王の娘シュエピ・チャンターを結婚させて，アラカンの都ラウンヂエッにて王位に即かせた。ノーヤターの支配を欲しないアラカン王の弟でタンドウェーの太守はペグーのヤーザーダリ王に援助を乞うた。ヤーザーダリ王は彼の願いを入れてモン・タライン軍をアラカンに進めたので，アラカン国はビルマ軍とモン・タライン軍の戦場となってしまった。戦闘の結果，モン・タライン軍はアラカンの首都を奪取し，ビルマ王家に属するシュエピ・チャンター王妃をペグーへ連れ去った。

その後，20年余りベンガルにて亡命生活をしていたナラメイ゛ラはベンガルの王マハーメディンの援助によって1430年にアラカン国の王位を回復した。ナラメイ゛ラの部下の回教徒たちはムロハウンにサンディカン・モスクを建てた。相次ぐ外敵の侵入にラウンヂエッの都もすでに運命の傾いたかのように見え，一方ムロハウンを幸運の地なりとする兆候が現われたので，彼はムロハウンに遷都を決意した。占星師たちは，「もし王が遷都するならば，王は年内に歿するであろう。」と言ったが，彼は「遷都によって人民に益するところあらば，余は死すとも可なり。」と言って，その主張をまげなかった。ナラメイ゛ラ王は1433年にムロハウンの都を建設し，その翌年1434年に亡くなった。

ムロハウンの都は米作平野に囲まれた丘陵地に建設され，城内に通ずる水道は街を区劃する街路をなしている。この人口稠密の海港ムロハウン（または，Myauk-u とも呼ばれる）はその後アラカンの都として4百年間続いた。学報22号，32頁にて触れたが，アラカン国の歴代諸王は自ら仏教徒でありながら，各自その別名として回教名をもち，あるいはペルアァ文字を以て Kalima，即ち，回教の「信仰表白」を誌した円形徽章を鋳造することをすら普通とした。これらの徽章は初めはベンガルで鋳造されたことは疑いないが，その後，彼らはアラカンにてこれを鋳造するようになった。

*Ali Khan (Naranū, 1434～1459)

ナラメイ゛ラの弟で，その世継ぎであったアリ・カンはベンガルの宗主権を動揺させ，チタゴンの領土の一部をアラカンに併合した。1439年にアラカン南部の一州であるタンドウェーの町端れに暴動が起り，町ぐるみビルマ側へ入ってきて援助を請うた。そこで，ビルマのナラパティ王はタヤービヤー大臣にビルマ軍をひきいさせて暴動を鎮め，タンドウェーとラームミョーをアラカンに属せしめた。アリ・カンは1454年にポーガウン・ヌエ゛ガン・トー（または，ヌエチョータウンとも呼ばれる）にてナラパティ王と会合し，ポーガウン山脈をアラカンとビルマとの国境

に定めた。(学報25号6～7頁)

*Ali Khan の名については学報22号，32頁に述べた通りであるが，なお彼の別名を Min Khari とも Sarika とも記されている。また，一説には（アーサー・フェアー，p.114)，Min Khari は Ali Khan を名乗る Naranū の弟で，兄の死後，彼も兄と同じ号 Ali Khan を名乗って王位に即いた，とある。

Bhasawbyū (Kalimah Shah, *1455～*1478)

バソービューはアリ・カンの息子で，チタゴンの首都を征服し，その時以来2百有余年間チタゴンはアラカンの属国となっていた。この王の時代にはアラカンの国力が充実し，インワ王朝とも比肩し得る程の実力を備えたと云われている。また，文学の面においてもエーヂン詩人として有名な Adūmin:nyo 大臣が出現した。彼のエーヂン詩はビルマ文学史上高く評価され，最古のエーヂン詩であり，ビルマ人のエーヂン詩人 Shinthu-yè と比較される。また，その当時よりビルマ—アラカンの間に学問の交流が盛んになりはじめたことも注目すべきである。

*アラカン王在位の年代がこの王の前後よりビルマ人，英人史家によって4年の差が生じている。従って，バソービュー王の在位は，ハーヴィでは，1459～1482と記されている。

ハーヴィの「ビルマ史」(p. 91) ではアドゥミンニョが史詩「ヤカイン・ミンタミー・エーヂン」を書いたのはナラメイクラ王治世下の頃である，と記されているが，ウ・ペ・マウンティンの「ビルマ文学史」及び他のビルマ史家においてもバソービュー王の時代の人であることは明白である。

バソービュー王はその子ドアリヤによって起された反乱で命を失った（アーサー・フェアー，p. 115）が，バソービュー王が亡くなった後，アラカン国では次に述べる Minbin 王まで8代の王が支配しているが，注目すべき事件はなく，ただ横領と暗殺の時期が続き，海岸地帯では1500年頃よりポルトガル人が集団をなして村落を荒し廻っていた。

Minbin (1531～53)

バソービュー王以後9代目のアラカン国王ミンビンは，ビルマ史家によれば，Hpalaung: という別名をもっていたが，ハーヴィでは (p. 92) Hpalaung は Feringhi, 即ち，ポルトガル人のことを指している。

彼はタウングー王タビン・シュエティの攻撃を予知して，Mrohaung 都城の周囲に深い濠を設けて防壁を補強した。そして，侵入軍に対して軍備を整えると同時に，プロームを援助するためにも兵力を送った。しかし，1541年バイン・ナウンの軍によって敗られ，2年後，タビン・シュエティ王自身がアラカンに現われ，アラカン軍をムロハウンの城壁にまで追い込んだ。しかし，強固な要塞を陥し入れることができず，学報28号，71～72頁に述べた理由もあって，ビルマ軍は引きあげたので，1546年平和が取り戻された。また，ビルマ軍と戦っていた間にも，テッパーラー山を根拠とする蛮族（テッ族）の侵入をもよく防いだ。

ミンビン王はムロハウンに五つのパゴダ，即ち，Shit-thaung, Dukka-thein, Lemyethna, Shwe-daung, とセイロンの仏牙を祀るために Andaw 等を建立した。

ビルマ軍がムロハウンを占領することができなかった理由としてあげられることは，都城の要塞が水深い濠で固められていたこと。また，アラカン軍は海路用の軍船をもち，それを巧みに操ることによってビルマ軍を海上における戦いで破ったことであった。アラカン軍の船隊は幾世紀もの間インドのガンヂス河地帯の恐怖になっており，時折ポルトガル人の船舶をも阻止してきた。遂に＊アラカンの水夫たちはポルトガル人の冒険家たちと手を結び，1550年から1660年までアラカン史に輝かしい時期をもたらした。ミンビン王亡き後，1553年より1593年までの40年間には大した事件は起っていない。

＊アラカン人がポルトガル海賊と共にインド各地を荒し廻ったという記録もある。(U On Maung, Vol. II, p. 95)

Min:yāzāgyī: (1593～1612)

ミンヤーザーヂー王の時代における主な事件はタウングーの王子と結託してペグーを攻撃したことであった。この遠征にはポルトガル人 De Brito, 王位継承者 Min: hkamaung:, 詩人 Ukkapyan 等が含まれていた。彼らは先づシリアム（ビルマ地名＊Than-hlyin（ティン フリン）) を攻めて，その町を占領し，ミンカマウンは彼の一族であるンガ・インガーをシリアムの領主としてそこに残したが，デ・ブリートもそこに残り，デ・ブリート自身がシリアムを占拠して，恰かも自らが支配者の如く振舞った。

＊Than-hlyin=*S*yriam, town, a few miles east of Rangoon, at the confluence of the Pegu and Rangoon rivers.

(Burmese Glossary by Cornyn and Musgrave)

ペグーを攻めたアラカン軍はペグー宮廷を破壊し，ナンダ・バインの娘を含む多くの戦利品を持ち去って，アラカンへ引き上げた。途中，王の賢明な大臣でありチタゴンの領主であったMahā-pyinnyagyaw（マハー・ピンニャヂョー）が死し，ネグリ岬の近くモーティンソンという所に葬むられた。この大臣は若い頃より王に仕え，彼の編纂した "Mahāpyinnyagyaw Hpyat-hton:" は純然たる仏教の立場からマヌ法典を解釈したものであって，極めて貴重な権威ある法典書である。

D. G. E. Hall, p. 58には，Pieter Willemsz van Elbing が1806年にオランダ東インド会社の貿易事情を調査するためにアラカンへ派遣されたが，その際，ペグーよりもたらされた財宝，白象，ペグー王女等を目撃した，と述べている。また，彼はムロハウンに工場を開設することに反対した。その理由は，アラカン王が貿易よりもオランダから陸海軍の援助の方を一層望んでいることを知ったからである。

ミンヤーザージー王の時代にはポルトガル人に代ってオランダ人が勢力を増し，アラカン及びビルマの貿易市場に登場し始めていた。

Min: hkamaung: (Husein Shah, 1612～22)

ミンカマウンは王子の時，シリアムにて De Brito によって逮捕されたが，身代金によって救

われた。彼の業績は1617年に，Sandwip 島を占領したことであったが，彼はその島を根城としていたポルトガル海賊をオランダ船隊の援助によって打破った。この島はガンジス河の三角州地帯を占める貿易の中心地点であった。その時以来，ポルトガル人たちはミンカマウンのもとに仕え，チタゴンに住んだ。彼らはアラカン王の名でサンドウィップ，ノアカリ，バッケルグンゲ，スンダルバンス等を制し，なおダッカとムルシダバード（ビルマ名 Maukthūzā（マク トゥーザー）） を侵略して，彼らの収入源はアラカン王の助けによる奴隷略奪と海賊行為であった。

また，モンゴル族の侵入があったが，ミンカマウンによって反撃され，王はダッカに至るまでのベンガルの地を征服した。しかし，王の死と共にすべての征服による獲得は無に帰した。

Harvey の "Outline of Burmese History", p. 94 ではミンカマウン王の時代，即ち，17世紀の初め頃になると，アラカン人に Magh という呼称が与えられている。それは同「ビルマ史」五十嵐智昭氏訳の 125 頁の〔註〕によれば，その名は本来ベンガル人が主としてチタゴンに住むアリヤン系の一種族を呼ぶに用いたものであるが，彼ら自身は自称として Rajbansi（「王族」を意味す）の名を用い，仏教を奉じ，その言語はチタゴン訛りのベンガル語であった。ここに謂う Magh はアラカン人全体の呼称に用いられているが，アラカン人そのものはモンゴル系種族である。尚，アーサー・フェアの「ビルマ史」（岡村武雄氏訳，72頁）によれば，Mag，または，Maga は，「中インドの Magada 地方からアラカンへ来た移住民の子孫であって，ベンガルの住民によって彼らに与えられた名が彼らの種族，及び彼らが来た国を正しく表わしている。」そして，アキヤブ地方に少数見出される，とのことである。

Hall, p. 57 にも，Mugg (Bengali Magh) という名称が記されているが，ここではアラカン人はその名称を否認し，ベンガル国境における異民族の雑婚の結果生み出されたものであるとしている。そして，その語源の解明には至っていない。

Thīri Thudhamma Yāza (1622～38)

ティリ・トゥダンマはミンカマウン王の子で，16年間アラカンを統治したが，その間，彼はダッカより朝貢を要請したり，ビルマの事件にも関渉した。

王はバタヴィアにおけるオランダ人と親密な関係を結び，彼の首都にオランダ人の工場を開設するようにすすめた。ところが彼らにはインドネシア植民開発のために米と奴隷の供給が緊急に必要であった。そして，アラカンよりそれらを大量に獲得することができた。アラカンは *Dhaññа Wadī（「穀物豊穣の地」の意）と云われる豊かな米産地として知られている。また，奴隷はベンガル襲撃によって得たのであった。

*Dhaññа wadī というパーリ語の地名には「威徳高き人の地」という意味もあって，学者，高僧等が輩出した所でもあるるので，「穀物豊穣の地」の意味と両方に通じるのである。(U San Shwe: Khit-thit Myanma Hpat-sā, p. 97)

ティリ・トゥダンマ王の死後，Narapatigyi (1638～45) が即位したが，オランダ人とは折合いが悪かったため彼らは数年間工場を閉鎖した。そして，サンダ・トゥダンマ (1652～84) の統

治の頃までそれは再開されなかった。ティリ・トゥダンマ王が没した1638年より1652年までは何ら記述すべき事件は起っていないようである。

Sanda Thudhamma (1652～84)

彼はアラカン史上人徳の高い王の一人としてあげられている。宗教面における彼の功績は Zina-man-aung, Thekya-man-aung, Yatana-man-aung, Shwekya-Thein, Lokamu 等数多くのパゴダを建立し，Upasampada 受戒（学報17号，76頁）を復活させるため40人を一団とする僧団をセイロンへ送った。

商業面では，1653年に王はバタヴィアと通商条約を結んだが，それはオランダ人がムロハウンにて貿易することを条件としたものであった。王は彼の長い治世間，ヨーロッパ人の商人に対し，ビルマが取った政策よりはるかに啓蒙的政策を追求した。そして，ルピー以前のムガール帝国時代のタンガが海港にて用いられていたが，1660年頃にはインドの貨幣鋳造法を真似て，アラカン貨幣鋳造を行なった。小さい市場の取引では，たから貝（ビルマ語で kywe（ちゅうえ）という）が用いられていた。それらはオランダ船にてしばしばマルダィヴ諸島からアラカンに輸入され，その貝から48viss を１ルピーにて売られていた。また，オランダ人によってバタヴィアよりアラカンに輸入された主な品目は香料と鉄であり，コロマンデル海岸地帯の工場よりはインド製反物であった。（当時の）バタヴィアの刊行雑誌 Dag-register は，アラカンとの貿易がベンガル湾におけるオランダ商業の些細な部門でなかったことを記している。(Hall, p. 60)

しかし，サンダ・トゥダンマ王とオランダ人との関係は1665年ムガール年代記においても知られている一つの事件によって妨害された。それは Shah Jehan の子であり，ベンガルの総督であった Shah Shujah が病床に臥していた父の王位をめぐって彼の兄弟たちと争ったが，結局その翌年 Auranzeb（または，ビルマ名 Oranjit, 1658～1707）が勝利を得て王位の座を確保した。1660年シャー・シュジャは彼の兄弟たちの攻撃に対してベンガルを保持することができず，ダッカに逃れ，そこから彼の家族と共に多くの財宝をもって船にてアラカンへ向った。彼はディアンガのポルトガル人にメッカへ巡礼者として行くように忠告され，一時アラカン王の宮廷に避難した。サンダ・トゥダンマ王は彼にその目的のために数隻の船を約束した。ムガール政府は彼の引渡しを要求してきたが，アラカン王がその引渡しを延引している間に，事件が勃発した。それは1660年12月にシャー・シュジャの引きいる回教徒の一団が荒れ狂い，アラカン王の宮廷を焼打ちしようとした。その理由は，“A Guide to the History of Burma”, p. 65（著者不明）によれば，シャー・シュジャがアラカンに到着した際，彼の家族のうちの一人で美貌の娘と６頭のらくだに積んだ黄金や宝石を見たのであるが，サンダ・トゥダンマ王には余りにも大きな誘惑であった。王は彼ら一行をメッカへ送り届けるその報酬としてシャー・シュジャに彼の娘を要求したが，シャー・シュジャがモンゴル王家の直系であり，のみならず回教徒の婦女は異教徒に嫁ぐことができないという理由で王に拒絶した。そこでアラカン王はシャー・シュジャの財宝と娘を占有したので，シャー・シュジャは回教徒たちにアラカン王に対し一撥を起すように煽動した，と述べられている。

しかし，その計画を知ったアラカン人は彼らを虐殺し，逃亡王子自身の生命もアラカン王の母

の取りなしによって辛うじて救われた。王の母は王子を殺害するような危険な行状を国民に教えることはアラカン王として賢明ではないと主張した。その後，シャー・シュジャは監禁されたが，翌年の2月に虐殺が行われ，彼は姿を消して，再び現われなかった。（また，他の書物では，彼は陰謀者のうちに含まれて処刑された，とも記されている。）

ムロハウンにおけるオランダ商人たちはシャー・シュジャがアラカンの王位を奪おうとして監禁され，逃れようとしてアラカン軍と戦っているうちに生命を失ったのであると，聞かされたらしい。そして，彼の妻や子供たちは生捕られ，婦人はハーレムに入れられ，王子たちはきびしい監視のもとに置かれた。約2年後，彼らを解放せんと数名の回教徒によって必死の試みがなされ，宮廷の一部分が焼打ちされた。しかし，その計画は失敗し，彼らは斬首され，首都において回教徒とベンガル人は大虐殺された。また，王宮のハーレムに閉ぢ込められていたムガールの王女たちは餓死した，と伝えられている。

この最後の事件の少し前にモンゴル系のベンガルの総督は若い王子たちの降服を勧告した緊急メッセージを送ったが，サンダ・トゥダンマ王はそれを無視し，その使者を投獄した。ムガールの報復を恐れた王はディアンガのポルトガル人にベンガル襲撃の勢力を倍加するように要請した。かくして，1664年に彼らのガレアス船はダッカに向って河を航行し，240隻より成るムガールの艦隊を撃破して遠くへ追い散らした。ムガール政府はアラカン海賊の根城はどうしても撃滅せねばならないと決定を下し，オーランゼッブの母方の叔父に当るベンガル総督 Shayista Khan に全力をあげて戦うべく命令した。

両側共に軍船を必要とした。そして両側共オランダに援助の要請をしきりにせがんだ。ところが，1665年には事態はどたん場に追込まれた。というのは，オランダ人たちは頑強に中立の立場を維持したので，シャイスタ・カーンは，もし彼らが直ちにアラカンを撤退しないならば，彼らのベンガルにある工場より彼らを放逐する，と云って威喝した。そこでその年の11月のある暗い夜に彼らはムロハウンの工場から運べるだけの物を全部4隻の船に積んで，アラカン王に彼らの行動を悟られないうちに追跡を免れる所まで逃れた。

シャイスタ・カーンはサンドウィプ島にあるポルトガルの前哨地点を攻撃し，その要塞よりアラカン人を追い払った。それより数ケ月後，1666年に，それまで1世紀間に渡ってガンジス河の肥沃なデルタ地帯に多大の荒廃をもたらしていた手ごわい海港を占領し，それを破壊した。そして，チタゴンとラームをアラカンより奪取し，2千人のアラカンの奴隷商人を今度は奴隷として売った。また，幾人かはダッカより12マイル南にあるヨーロッパ人市場にて平和な市民として住むことを許された。そこでは今日に至るも尚彼らの子孫が残存している，とのことである。

チタゴンの陥落はアラカン国にとっては致命的打撃であった。オランダ人はアラカンが平静を取戻した後，帰ってきて，貿易を再開したが，それも長く続かず，その後間もなく1684年にサンダ・トゥダンマ王はこの世を去った。王の死と共にアラカン国の偉大さもそれと共に終りを告げ，不幸な運命をたどることとなった。

虐殺を逃れたシャー・シュジャの部下たちは王室警護の射手として登録され，彼らの意のままに王を立て，また，王を廃して，アラカン国を餌食とした。かくして，ムガールの軍はますます

強力となり，1692年彼らはアラカンの宮廷を焼き払い，アラカン国中をさまよい行く所々に火を放ち，剣を振った。アラカン国内は混乱と不安の危険状態に入った。

現在でも，昔アラカン宮廷のあった場所にはサンダ・トゥダンマ王の立像が残っていて，その石柱には王の別名 Pazāmin: と刻まれている。そして，この時代のすぐれた彫刻，石造美術によってアラカン文化を示し得る作品が納められてあった保存所が内乱のため破壊され，宝物を紛失した，とのことである。（Yinkyē: hmu〔ビルマ文化〕，1955年9月号16頁）。

Sanda Wiziya (1710～31)

サンダ・ウィジヤの短い統治間も同じような状態が続いていたが，彼は始末に負えないモンゴル族の海賊を打ち破り，彼らを Ramree 島（ビルマ名 Mān-aung-kywun:）やアキヤブ地方へ追い払った。彼はかなりの勢力を保持し，テッパーラ山に立てこもるテッ族に対しても防備を整え，また時にはビルマ各地を侵略した。そして，約20年間アラカンはやや平穏であった。しかし，1731年彼が暗殺されて後は再び無政府状態が続き，統一が失われた。1782年にアラカン国最後の王 Thamada が即位したが，その後2年を経て，1784年ビルマではコンバウン王朝時代に至って，Bodawpaya 王が軍隊を送ってアラカンを占領し，その翌年の初め頃，タマダ王を廃位して，アラカンを併合した。しかし，1824～26年の間に起った第一次英緬戦争の結果，アラカンは英領の一州となった。

参　考　文　献

U Tin U : Myanmā Naing-ngandaw Thamaing San-Pya (1957)

U Hpō: Kyā: : Myanmā Yāzawin Akyin: (1937)

U On Maung : Myanmā Yāzawim-thit (1953)

U Hpe Maung Tin : Myanmā Sāpe Thamaing: (1955)

Zawgyi & Min: Thu Woṅ : Sāpe Loka, Vol. I (1949)

著 者 不 明 : A Guide to the History of Burma

D. G. E. Hall : Burma (1950)

G. E. Harvey : Outline of Burmese History (1947)

ハーヴィ著 五十嵐智昭訳 : ビルマ史 (1943)

アーサー・フェアー著 岡 村 武 雄 訳 : ビルマ史 (昭18)

Yin-kyē: hmu (1955)

Judson : Bur-Eng Dict. (1953)

U On: Shwe : That-pon-Abhidān (1956)

Cornyn & Musgrave : Burmese Glossary.

水野弘元著：パーリ語辞典．(1968)

U San Shwe : Khit-thit Myanma Hpat-sā-Dutiya-dan: (1940)

J. G. Scott : Burma (1921)

Yakaing Sayadaw : Dhanyawadī Ayē:dawpon (Myanmāmin: mya: Ayē:dawpon) (1967)